

「巻頭言」

理論と実践の架橋をめざして

—実務家教員の課題—

武嶋 俊行

上越教育大学に教職大学院が発足し、私が実務家教員として本学に着任してから早くも2年が経過した。今改めて、私は本当に大学教員にふさわしいのか、実務家教員とは一体何なのか、実務家教員として院生を今後どのように指導すればよいのかなど、再考すべき課題が山積していることを痛感している。特に教職大学院では実務家教員が4割以上を占めるため、教職大学院そのもののあり方とも関連して、自らの存在理由を自問自答せざるを得ないのである。

実務家教員の強み

実務家教員の対概念は、研究者教員である。そこで研究者教員との対比において、実務家教員について考えてみたい。

第1に、学問の細分化が顕著な現在、研究者が研究対象とする領域は狭く限定されており、研究者教員といえども、専攻領域以外では学術的には「素人」と言わざるを得ない。しかし、実務家教員が勤務してきた学校現場等の個々の教育事象は狭く限定されたものではなく、事象全体が広範に連結統合されたものである。すべての教育事象は個々の児童・生徒を中心に渾然一体として、総合的なものである。実務家教員はゼネラリストとして、学校教育全般に関わる広範な知識・技能・経験を有しているはずである。研究者教員が厳密で分析的な視点に立つとすれば、実務家教員は幅広い、総合的な視点に立つ者である。

第2に、研究者教員は価値中立的に対象を外から数量的に記述する。普遍妥当性と法則性を追究する彼らにとって、「個」とは法則性を立証するためのデータに過ぎない。個別具体の世界に踏み込めば、科学性・普遍妥当性・法則性は失わざるを得ない。抽象化という方法論を採る科学とは、元来そういうものである。

しかし、学校現場等で永年、実践を重ねてきた実務家教員は教育事象に対して当事者として内在的な解釈を重ねてきた。「今・ここ」にいる眼前の「個」である児童・生徒に焦点化した具体的な個別事象に直接向かい合ってきた実務家教員にとって、数量的で抽象的な一般的理解に耐えることは到底できない。実務家教員にとって、児童・生徒という「個」は目的そのものである。教職大学院で推奨される事例研究のコンテンツは、まさに実務家教員自らの実務経験や実践感覚に裏づけられたものでなければならないのである。

第3に、学校教育で掲げられる実践的課題には、学術研究の対象には馴染まないものも少なくない。学術研究だけで教育事象のすべてをカバーすることは難しく、あえて言えば学際的アプローチが必要である。しかし、実務家教員はこれまで、研究者教員の手からこぼれ落ちる個別具体の切実な教育事象に真正面から取り組んできたのである。理論的裏づけがあろうとなかろうと、実

実務教員が立ち向かわなければならなかった教育事象にはいかなる“隙間”も存在しなかった。細部の一つひとつを決して疎かにしないのが実務教員の真骨頂である。

結論的に言えば、ゼネラリストである実務教員は、学校教育全般に関わる総合的な知識・技能・経験を広範に有し、現実的対応を迫られた当事者経験に基づく総合的視点に立って、教育事象を「個」に焦点化して内在的・個別具体的に理解する者である。これが、研究者教員には見られない、実務教員独自の強みとなるものである。

実務教員の課題

しかし、実務教員には弱みも多い。

第1に、永年携わった実務経験や教育実践であっても、やがて実践感覚は薄らぎ忘れられ、剥離していくものである。過去の実務経験は次第に陳腐化して、現在の児童・生徒や教育事情には適合し難くなる。中教審WGでは、実務を離れて5～10年以内が実務教員の有効期限とされたが、「元」実務家の実務経験は常に最新の実践感覚によって更新されなければならない。法科大学院の実務教員は現職弁護士や現職検察官であるが、片道切符で着任した本学教職大学院の実務教員は、この弱みを十分自覚する必要がある。しかし、「元」実務家の実践感覚の常時更新は難しい。特に現職時代の緊張感・責任感・義務感・当事者意識・ストレスなど、今では懐かしい(?)現場感覚まで保持し続けることは不可能である。

第2に、実際に経験した個々の教育事象と実務は脈絡がなく無秩序で、因果関係や相関関係は把握し難い。単なる実務経験は個別事象としてバラバラであり、そのままでは教職大学院で指導可能な体系的知識にはなり得ない。したがって、実務経験と経験的教育事象の体系化と構造化が必要となる。個々の教育事象を歴史的・法制的・社会的文脈のなかにきちんと位置づけ、意味づけなければ、事例研究で活用可能な効果的知識には昇華できない。

第3に、実務教員が学校現場で取り組んできた個々の教育事象は、二度と再現されない一回性と交換不能な個性を特色とする。それを、科学的言説が適用可能な一般性の文脈にどのようにして位置づけるのか。事例研究で活用するにしても、二度と起きない教育事象の引用では、受講者の関心と呼ぶことは難しい。実務教員には、こうした個性を一般的普遍性に変換できる能力、また個性の中から一般的普遍性を読み取れる能力や省察力が問われている。ある意味、こうした能力は研究者教員のそれと相似形かもしれない。

研究者教員と実務教員の協働関係をめざして

もとより研究者教員と実務教員は対立するものではなく、相互に補い合う協働関係に立たなければならない。研究者教員は実務家性を、実務教員は研究者性を一定程度、兼備した存在でなければならない。他の教職大学院では、両種教員のTTが喧伝され、両者の差別化を図る傾向が見られるが、本学教職大学院では両者の連携協力互惠関係と、相互研鑽による同僚的協働関係を確実に構築していかななければならない。

教職大学院における「理論と実践の架橋」という永遠の課題は、両種の教員個々人が自らの努力によって達成すべきであるとともに、教員集団全体としても常に意識して挑戦し続けなければならないものなのである。